



CNNスペシャル・
インタビュー



Making “Gig Work” Work

米配車大手 Uber

ダラ・コスロシャヒ CEO

安全かつ自由な働き方を実現するために

「ギグワーク」というビジネスモデルに依存する米配車大手 Uber。ギグワークとは、インターネットを通じて仕事と労働者をマッチングさせ、短期・単発の仕事を受け負うビジネスモデルのことで、特にアメリカで広がりを見せている。一方で、昨年9月、カリフォルニア州で労働者保護を目的とした、ドライバーの「従業員化」を義務付ける「ギグエコノミー規制法」が成立した。Uberにとって大打撃となるこの新法の成立、さらには社内ハラスメントなど数々の不祥事が相次ぐ中、同社は今後どのような取り組みを行うのか。CEOのダラ・コスロシャヒ氏が語ってくれた。



■インタビュー／
クリスティアン・アマンプール

イラン人の父と英国人の母を持つ。生まれはロンドンだが、幼少期はテヘランで過ごした。英国でジャーナリズム養成講座を修了。渡米し、ロードアイランド大学でジャーナリズムを専攻し、首席で卒業。1983年、CNNに入社。数々の紛争地帯で現地取材を行い、ジャーナリストとして高い評価を得ている。



■ダラ・コスロシャヒ

ブラウン大学卒業。2005年に米旅行サイト最大手・エクスペディアのCEOに就任後、2017年にUberのCEOに就任。Uberでは社内ハラスメントなど不祥事が続いており、CEOのポストが空席だったところ、コスロシャヒ氏が経営トップに指名される。企業文化の刷新や訴訟対応に当たり、さらには新安全対策を発表。1969年、イラン生まれ。

60 挑戦の果てに

Christiane Amanpour Uber is the company people love to hate. Let me just read a little bit from Farhad Manjoo in the *New York Times*: “Should Uber be kneecapped for its long history of flouting the law, or can it possibly be reformed? Or am I a credulous dolt for even suggesting redemption for one of the sorriest companies ever to emerge from Silicon Valley’s tortured hothouse?”

Dara Khosrowshahi So, that’s one person’s opinion. We have come from a phase in our development where it was all about growth at all costs. And Uber did challenge the authorities, because it strongly felt at the time that the authorities were wrong, they were trying to keep the systems as they were and not allow innovation to prosper, not allow truly new ideas to grow. That started, I think, from a good place,

love to hate:

つい悪口を言いたくなる

kneecap:

～の膝の血を撃ち抜く

▶比喩表現で「罰として大打撃を与える」という意味。

flout the law:

法をないがしろにする、ばかにして法に従わない

reform:

～を刷新する、改心させる

credulous:

信じやすい、だまされやすい

dolt:

まぬけ、愚か者

redemption:

救済、救い

sorry:

嘆かわしい、情けない

emerge from:

～から出現する

tortured:

苦悩に満ちた、ひどく苦しい

hothouse:

温室、温床

phase:

段階

be all about:

大事なのは～である、～が肝心である

at all costs:

是が非でも、どんな代償を払っても

challenge:

～に異を唱える、あらがう

the authorities:

当局

keep...as it is:

…をそのまましておく

not allow...to do:

…が～するのを認めない

innovation:

革新的なやり方、革新

prosper:

繁栄する、成功する

クリスティアン・アマンプール Uber という会社は、皆がつい悪口を言いたくなる会社です。ニューヨーク・タイムズ紙のファルhad・マンジュー氏 (のコラム) を少しだけ読んでみましょう。「Uberは長年にわたって法をないがしろにしたことで厳しく罰せられるべきだろうか、それとも改革されうるのだろうか。はたまた私は、だまされやすい愚か者なのだろうか、シリコンバレーという苦悩に満ちた温床から出現した最も嘆かわしい会社の一つに対して名誉挽回を示唆しようとまでするなんて」

ダラ・コスロシャヒ まあ、それは一個人の見解ですから。われわれはある成長段階を通過してきました、なんとしても拡大しようという。そして、Uberは確かに当局に異を唱えた。というのも、当時は強く感じていたからです、当局は間違っている、従来の制度を変えずに守ろうとして、革新的なやり方を阻止しようとし、真に新しいアイデアの成長を阻止しようとしている、と。その (当局に対する抵抗という) 理念は妥当だった